

洋丸（字に自信なし）」と記され、日本の船であろうと思ったが、船員を見ると長髪であり、現地の朝鮮人が皆長髪のためまた疑い、船員に「この船は日本に行きますか」と尋ねると「間違いない日本は佐世保港に着きます」と言った。これでやっと帰れる実感が湧き、思わず嬉し涙が頬を伝わり止めようもなかった。

この船には地方人の女子供も一緒であり、皆、喜んで泣いていた。昭和二十一年十二月三十一日、ドラの音高く響く興南港を後に日本に向かつての出港であり、捕虜生活の終わりでもあった。後で知ったが、我々は最も早い帰国組であり、佐世保に上陸した。

五七飛大からの同年兵の早川君は、ギードロも北朝鮮も一緒に今でも交際している。

現在は家族にも恵まれ、市の遺族会長を務めるとともに、全抑協の岐阜支部理事としてご奉公させていただいております。

心残りには、古茂山に眠る戦友の墓参りに行きた

いのですが、これは叶わぬ夢のようです。

シベリア抑留記

愛知県 中村 恒夫

一、出生から入隊

長野県飯田市で生まれた。長野県立飯田商業学校中退（現 長姫高校）

製菓業従事

昭和十七（一九四二）年～十八年（二年間、徴用にて三菱重工業名古屋航空機製作所第二工作部工務課勤務）

二、ソ連軍侵攻前

昭和十九年徴集、個有部隊号、第一斐徳陸軍病院―通称部隊号、満州第三四八部隊

満州国密山県斐徳地区

衛生部員のため、九九式短小銃 陸軍衛生兵

長、教育助手、中隊事務室勤務

三、ソ連軍侵攻

病院施設を斐徳より牡丹江に移転業務中、開戦となる。戦闘にたえぬ兵（患者）は南方へ転送する。独歩患者は白衣より兵装に着替え、病院にアルコールを散布し放火して西方へ進む。小銃と手榴弾各自二発、小銃弾前玩盒、後盒に満たす。ソ連軍の砲爆撃激しく、後退を重ねて横道河子の山にて停戦命令を受け武装を解除す。

四、終戦

終戦直後の感想は、安堵と無念の心相半ばする。拉古の収容所にて、約半月ほど食料はほとんど配給はなく、鉄条網をかくぐり周囲の畑のジャガイモ、雑草を食べて飢えをしのぐ。

五、シベリア抑留地への旅

拉古収容所にて約五百人単位で一個大隊編成、行軍を開始する。大隊長は陸軍砲兵大尉松本英太郎殿（九州出身）。

下城子駅頭にて、ソ連の主計兵とかけ合い、時計と交換で餅米二俵（麻袋入り）と交換成立、第三中隊全員に配る。

拉古よりグロデコウヴォまで苦難の行軍（日程忘却）。

六、抑留地の生活

トランスコーフ地区にて大隊（四中隊）編成。作業は伐採が主だったが、その他に雑役あり。シラミの駆除には大いに悩まされ続けた。昼休憩の際、飯盒にて衣類の煮沸消毒するも、帰隊就寝時にシラミが進入してきて防ぐ手段皆無（藁、枯れ草を布団替わりに）。

七、労役

昭和二十年十二月、同年兵の清水上等兵病死す。中隊長の命で私と同年兵二人で遺体を茶毘に付する。当日珍しく好天にて焚き火の側で居眠りしたためか、同日夜より高熱にて、薬品もなく（ロシア兵略奪）、衰弱極まりてチグロワヤ陸軍病院へ入院。陸軍病院とは名ばかりで天幕張り。入院患者約四十人ほど、連日死亡す。冬期のため穴が掘れず、死体は裏の空き地にそのまま野積みのお有様にて、病院は結局、働けぬ者の死ぬまでの一時の溜まり場であったと思われる。九死に一生を得て熱が下がり元の中隊に復帰する。

伐採の目的はペーチカの薪であって、ノルマは一人当たり、長さ二メートル、高さ、幅おのおの一メートルに並べる（つまり二立方メートル）。

別にこれといった賞罰はなかったと思います。

雪深い山中での巨木の伐採は、倒れるはずの場所から強風のため意外な所に倒れ、危険な目にしばしば遭った。

深い雪をかき分けて逃げ道を作る際に、掘り進んだ地面より冬ごもりのネズミが顔を出し、防寒靴で踏み殺し、ペーチカで焼いて食べるのが何よりの楽しみであった。

八、抑留者の統制管理

トランスコーフ・チグロワヤ・スイソエフカ（ガルボーシャ（発音正確ならず）。伐採と道路作業が主。

朝、朝食・昼食二食分配給あるも、少量のため、ほとんどの兵は朝一緒に食べてしまう。（雑穀類、米の姿はほとんど見なかった）

昼時になると野草を手当たり次第飯盒でゆでて食べた。煙草の葉を知らずに食べて死亡せる者あり。

肉類は全然記憶なし。作業中（冬季）、狼の残した鹿の肉を探し当てて肉にありついた。ネズミをとって食した（美味）。

オリガ港の付近に野営中、昼の休憩中、松本大

隊長殿と独製の将棋をさしているところをナチャニッカーゲル（収容所長）ににらまれ、中隊で私一人のみ転属となる（日本に帰国して聞きましたが、その日で一五大隊はナホトカに向かい帰国した）。私は一年余分に作業させられたことになりす（収容所長は、将棋を何か反ソ的な作戦を練っていたと勘違いされたのではないかと思われる）。

九、抑留中の生活と極限状態における意識

私の転属先は赤軍第一三一自動車修理工場（クラスヌイアルミー・ストリートリッツアチアジン・サルム）、同工場には約百五十人ほどの日本兵が修理工場の各作業場で働いていましたが、今までの劣悪な環境とはまるで違っていました。地獄より天国に來たかと思われました。八時間労働、日曜休業、質的、量的にも今までの生活から比べれば満足であった。私はトラックの腰材製作場へ配属され、さわったこともないミシンを

踏まされ、ミシン針を折って連日叱責を受けましたが、そのうちに仕事に馴れてロスケの三倍ノルマを達成をして、工場長の戦車兵のマイヨール（少佐）に当工場が一番優秀であると、千人ほどの従業員の前で褒められた。イヤイヤであってもノルマ以上仕事をするということは、とりも直さずロスケは働かないということになるのだとつくづく思いました。（共産主義の国だからかなと思いい、気の毒にもなった）

少年を引き抜いて某所に連行し洗脳教育、収容所に帰送後、気に入らない者は、片っ端から反動にされた。（私は初めから終わりまで、ナホトカまで反動扱いにされた。西も東も分からぬ者に共産主義教育をさせるソ連軍の意図に憤激）

十、帰還

昭和二十三年十二月八日で、奇しくも大詔奉戴日であった。

シベリア生活を基本と考えれば、この日本に感

謝こそすれ、不満なことは何一つないと思うべし。

私の抑留体験

愛知県 堀内俊彦

出生から入隊

大正十五（一九二六）年四月二十二日 神戸市にて出生

昭和二十（一九四五）年一月 日鉄鉱業㈱に入社
北支河北省武安鉱山に赴任

同年 四月 北支派遣軍独立歩兵第四四大隊
（衣第四二九六部隊）機関銃中隊に現地入営

終戦を迎えた場所

北朝鮮 咸興（内地防衛のため移動中に転進した）

シベリア抑留地への移動と帰還

東京ダモイと騙され興南から貨物船に乗せられウラジオストックで上陸

- ① 昭和二十年十月初め、ウラジオストックから約五十キロメートル離れた所へ収容された
- ② 同 二十一年十一月ころ 炭鉱のある近くの収容所に転属

- ③ 同 二十二年二月下旬 ウラジオストック市内の収容所に転属

- ④ 同 二十三年四月初め ナホトカ郊外の第二労働大隊に転属

- ⑤ 同 二十四年九月二日 舞鶴に上陸 復員

抑留された時の状況

終戦になると、「我々の部隊は現地の日本人を内地へ無事帰還させる任務につく」ということで小学校に集結させられ、そこで武装解除させられた。

しかし、何もせず何日か過ぎた日の夕刻、突如